現役教員からのメッセージ

大阪府立能勢高等学校　**萬　浪　温　子**

1、はじめに

私は現在、大阪府立能勢高等学校（総合学科）で教諭として勤務しています。奈良大学文学部文化財学科を2008年に卒業して、府立高校で非常勤講師を2年経て、昨年度の教員採用試験に合格し、今年度から正教員として働いています。

教科は地理歴史科、今年度の担当科目は日本史および世界史、専門は日本史です。校務分掌は教務部、部活動はバドミントン部および茶道部の副顧問をしています。

2、大学時代

私が教師を志したのは小学3年生の頃でした。それは当時の担任の先生に憧れて、というものだったのですが、その頃最も具体的に内容が見える仕事が「学校の先生」だったこと、そして、学校に対して肯定的に捉えていたことが背景にあるのだと思います。その後大学へと進学した私は、「先生になること」を夢としながらも、どうしても叶えたいと強く思うほどではなく、別に教師になれなくてもやりがいのある仕事に就ければ良いと思っていました。

大学3回生の終わり頃になると、「将来」が現実味を増してのしかかってきました。その頃から焦る気持ちをごまかすように、人並みに就職活動をする一方、「奈良大学教職学習会」にも参加するようになり、自分の将来についてのさまざまな可能性の模索を始めました。やみくもに始めた就職活動でしたが、さまざまな業種の説明会を受けたり面接に臨んだりする中で、自分にとって“やりたいこと”を思い描けるのが教育の分野ばかりで、結果的に教育関係の企業から内定を2つ頂きました。その頃には学習会においても教育のことについて、みなで意見を出し合ったり考えたりすることに充実感を見出していた私は、やはり公教育機関で働くことを諦めたくないと思い、頂いた内定を断って、教職への道を歩むことを決意しました。

その後、大学4回生での教育実習を経て、ますます教職への思いは強まりましたが、その年の採用試験には合格することができませんでした。卒業後は教職系の大学院への進学

も考えたのですが、自身の勉強不足もあって断念し、講師として実践経験を積むことを選択しました。この、大学生のころの就職活動、学習会、そして教育実習といった体験の中で、「先生になること」が私の「夢」であり「目標」になりました。それはつまり、採用試験に合格し、公立学校の教師になるという具体的な目標と、自分が理想とする教師になりたいという将来構想における夢、この２つが芽生えた時期でした。

3、非常勤講師時代

大学卒業後、私は母校である大阪府立交野高等学校（普通科）で非常勤講師として２年勤務しました。１年目は週８時間で３年生の日本史Ｂ（必修２単位）と世界史演習（選択２単位）を担当し、２年目は週10時間で２年生の日本史Ｂ（２単位）と３年生の日本史Ｂ（２単位）を担当させて頂きました。交野高校の生徒は全体的に穏やかでまじめで礼儀正しく、勤務されていた先生方はよく「天国だ」という表現をされていましたが、まさにそのような比喩が似合う学校でした。非常勤講師という仕事は授業をすることが主体になるので、学校運営などにはあまり関わりません。そのため、私は授業のあり方について深く考えるようになり、その中で強く感じたことが、教材研究の大切さと授業は“生き物”だということです。

教材研究はよく言われるように終わりのないもので、それはやはり、高校教師を選んだからには、専門性を高めることは必須条件であるからです。教師から授業は切っても切り離せないもの。教材研究は仕事というより、教師としての心構えのようなものだと思います。そして、２つ目に書きました、授業は生き物だということ。これが授業をするにあたっての不安要素でもあり、醍醐味でもあると思います。それは受け手の生徒が常に違うからです。もちろん人が変わるわけではないですが、時間帯やコンディションや時期によって、彼らは実にさまざまな表情を見せてくれます。それによって、もし同じクラスに同じ内容の授業を再度したとしても、全く同じ授業は二度と出来ない。そう感じた瞬間、本当に今、彼らと授業という空間を介して接している時間はかけがえのないものだと思い、この仕事の重みを実感しました。

非常勤講師として過ごした２年間は、本当に貴重な経験となりました。今年度、専任として赴任するにあたっても、この２年間自分なりに必死に取り組んだことが、力強く私の背中を押してくれました。２年間の中で、確信できたことがあります。それは、一生懸命は伝わる、ということ。逆に言うと、私の働きかけは思った以上に生徒に影響力を及ぼす、

という言い方も出来ます。言葉ひとつにしても、注意深く選ばないといけない。私の選んだ仕事は、他人にとって簡単に正にも負にもなるのだということを学びました。

4、専任としての現在

私が勤める大阪府立能勢高等学校は、大阪府の最北端に位置し、豊かな自然に囲まれた特色ある学校です。中高一貫教育校であること、国際交流に力を入れていること（海外から毎年留学生が来ること、修学旅行はマレーシアであることなど）、農場があること、少人数教育であること、など、挙げればきりがありません。その中で、私が今年度最も大変だったのは、総合学科ゆえに多彩な授業を開講しているということ、言うなれば、持ち科目数の多さです。今年度、私は、１年生の日本史Ａ（必修２単位）、２年生の世界史Ａ（必修２単位）と日本史Ｂ（選択４単位）及び教養日本史（選択２単位）、３年生の日本史演習（選択２単位）の計５科目 14 時間を担当しました。これまで、２科目しか持ったことがなかった私にとって、５科目は途方もない数に思えました。とにかく教材研究が大変で、時間が掛けられない分充分な勉強が出来ず、余裕を持った準備も出来なくなってしまいました。生徒も、中高一貫選抜のため学力入試がない分、基礎学力が伴わない生徒も多く、また学習意欲も全体的に高いとは言えません。中には家庭に複雑な課題を抱えている生徒もおり、生徒の対応も一筋縄ではいきませんでした。

専任となって講師時代と大きく変わったことは、責任の大きさです。科目が多いだとか、初任者であるだとかは、私個人の問題であって、一歩生徒の前に立ったら、初任者であろうがなんだろうが“教育のプロ”でなければなりません。もちろん、それは講師であってもそうなのですが、講師のとき以上にその意識が強くなりました。これまで私は、自分への自信のなさから、どこか思い切った指導が出来ていなかったと思います。しかし、それでは単に生徒からしたら「頼りない」だけです。周りの先生方も、私のような未熟者の意見も大切にしてくれて、私自身の指導をするようにと示唆してくれました。しかし、指導の方針、もっと大きく言えばそれは、教育観とも言えると思いますが、簡単に確立されるものではありません。むしろ安易に形成してしまってはいけない気がします。それでも、実際目の前の生徒を指導しなければならない場面は数多く訪れます。のちに変わっていくことは当然だと思いますが自分自身の明確なルール作りをし、生徒に不安感を与えないような指導をしていかなければならないと思いました。人は、立場が変われば意見が変わることがあると知ったのは最近です。私は教師として、生徒の未来に良い影響を及ぼす働き

かけをしていかなければならないのだと思います。

5、おわりに

この１年を振り返ると、初めての環境に慣れず体調を崩したこともありましたし、日々の授業をこなすことが精一杯で、正直校務ではあまり役に立てなかったと思います。また、コンスタントに初任者研修があり、研究授業の準備に心血を注ぎ……と、これまで歩んできた人生の中でも、最も忙しい１年でした。何度も何度も弱音を吐きました。それでも、この仕事をやめたいと思ったことは１度もありません。むしろ、やりたいことはどんどん溢れてきます。生徒たちの存在も、本当に大きいもので、落ち込ませてくれるのも生徒ですが、これ以上ないという喜びをもたらしてくれるのも生徒です。「先生」と呼んでもらうことに慣れてしまった自分がいますが、それでもふと、生徒の発する「先生」という呼びかけに感慨深くなってしまうときがあります。これから先の教員人生で、生徒の発する「先生」という言葉に、中身が伴うような教師になりたいと、強く思います。

来年度（平成23年度）、私は新１年生の担任を持つことになりました。小・中学校の初任者は１年目から担任を持つこともよくあるようですが、高校の場合、大抵２年目からのようです。私もその例にもれず担任を持つことになり、現在新年度準備に追われる日々を送っています。教師を志してから、ずっと夢にみてきた担任。間近に迎えた今、ひとつのサラダボウルの中で、不安と期待がごろごろと音を立ててぶつかりあっているような心境です。気持ちばかりが焦って不安でいっぱいになるときがあります。しかし、そんなときふと気付くのです。私はひとりでこの学年を見るのではなく、他の担任含め、学年主任、学年団、ひいては学校の教職員全体で、生徒たちを見るのだという、紛れもない事実。ひとりで完結する世界はありえません。どんな仕事も誰かと繋がっている。授業にしても、受け手である生徒がいなければ成り立たないのですから。同僚を信頼し、自身の指導に信念を持って、全力で生徒にぶつかること。恐れていても、不安であっても、明日はやってきます。だったら前向きに、向上心を持って、毎日に向かっていきたいと思うのです。

「あなたの夢は何ですか？」教師として、生徒たちに問いかけることの多い質問です。私のこの質問に対する回答は、最初に教師になることを夢みた小学校３年生のときから今までずっと変わりません。もちろんそこに込められた想いはその時々で変化しますが、今でも迷いなくこう答えます。それは「先生になること」である、と。